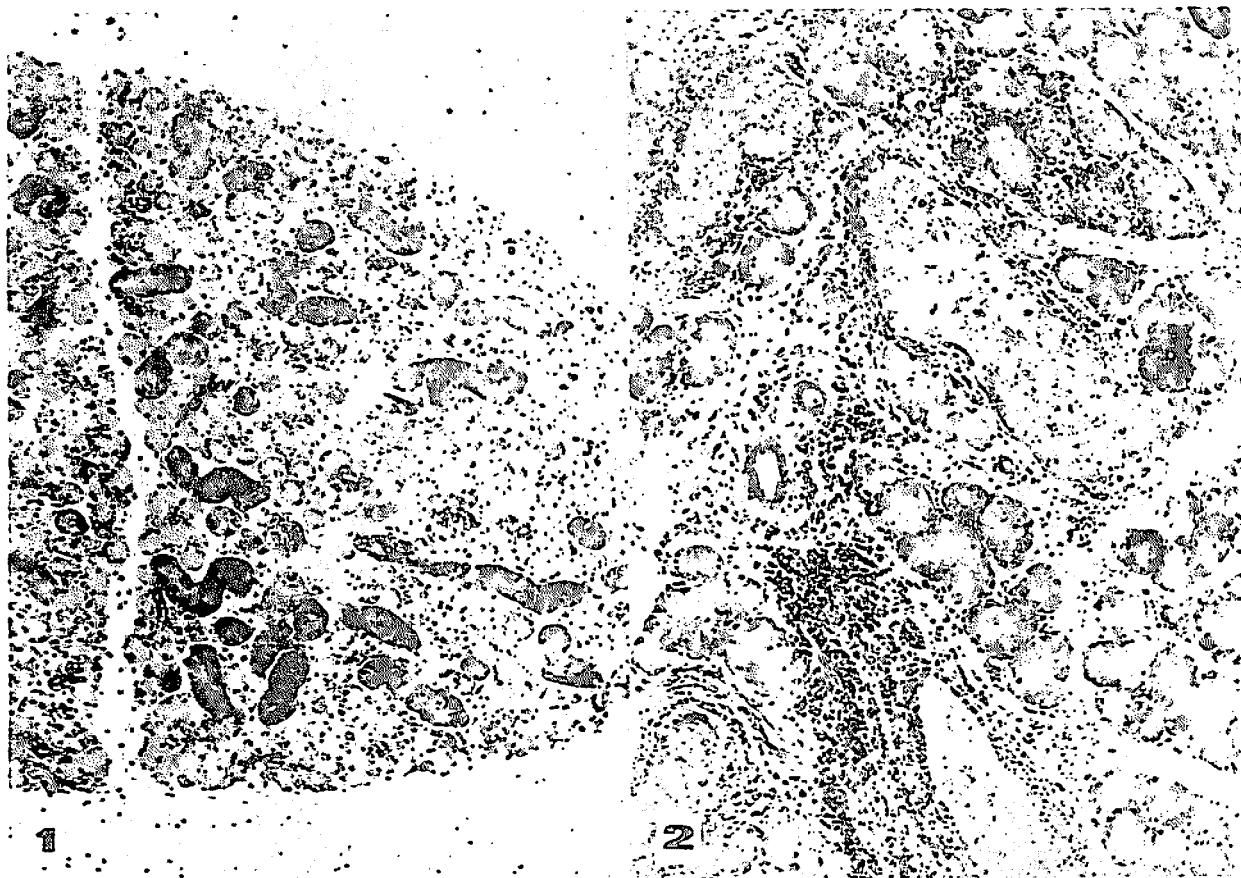


ラットの唾液腺

日本生物科学研究所出題 第17回獣医病理学研修会標本No.264



提出例は約14週齢の SD/JCL(SPF)ラット、雄で、発症後約3日目にエーテル深麻酔殺された。本病はある実験目的のため飼育されていたラット群で突然流行性に発生した。罹患動物の臨床症状は薬剤経口投与時に下顎部の痛覚を訴えるラットによって初めて認められた。これらのラットはその翌日あるいは翌々日に下顎部の高度腫脹ならびに赤色眼漏を示し、同時に採食および飲水の低下を伴っていた。平均約9%の体重減少が認められた。下顎腫脹を主徴とする臨床症状は発症後3日目頃にピークを示し、約1週間持続した。肉眼的に高度に腫大した顎下腺とその周囲組織における著しい膠様浸潤がとくに目を引いた。また顎下リンパ節の腫脹が顕著であったが、他の内臓諸器官に特徴的変化は見られなかった。

組織学的に主要病変は顎下腺、耳下腺、Harder腺、顎下リンパ節ならびに咽・喉頭で認められた。顎下腺および耳下腺の変化は類似していた。導管および終末部腺房上皮細胞の変性壊死性変化が瀰漫性に見られ、腺構築は不規則になっていた。導管上皮細胞は膨化崩壊し、分泌物および細胞崩壊産物による管腔の閉塞が屢々見られた(図1:顎下腺, 図2:耳下腺, ×90)。小葉間結合組織内の導管には、上皮細胞が有糸分裂を示しながら増殖して2~3層となり、扁平上皮化生を想わせるものが屢々見られた。両腺周囲、腺葉間および腺房間結合組織は高度の炎性水腫と細胞浸潤によって著しく巾を増し、各小葉と腺房は疎開していた。浸潤細胞はリンパ系細胞、好中球、組織球、形質細胞などからなり、場所によっては

可なり多数の肥胖細胞の参加が見られた。顎下腺および耳下腺の電顕像では腺房上皮および導管上皮細胞の細胞質には小空胞あるいはvesicleの形成があり、それらの腔内に無数のvirus粒子が含まれていた。virus粒子は球状で単位膜で被われ直径60~80nm、内部には直径約58nmの核様体を含み、中心部の明るいことが特徴であった。小空胞あるいはvesicle壁からは、種々のbudding過程にあるvirus粒子が認められた。Harder腺では間質は高度の細胞浸潤、水腫および多量の分泌物を含み拡張した導管によって著しく巾を増し、導管上皮細胞および導管に近接する管状胞状腺上皮細胞は高度の変性壊死性変化を示していた。顎下リンパ節は増生性変化を示し、胚中心は拡大して細網細胞に富み、変性崩壊核の小集団が多発性巣状に分布していた。喉頭部では、固有層における水腫、充血、細胞浸潤、喉頭腺々腔の拡張などにより粘膜は著しく肥厚していた。拡張した腺腔内には好中球および剝離上皮細胞を容れたものがあり、粘膜上皮には線毛の喪失、上皮の変性壊死・剝離が見られた。

診断:ラットにはコロナウイルスを原因とする“唾液腺・涙腺炎”という一感染症の存在が確立されている。本報告例はその流行病的な発生状況、臨床所見、病変の性質とその唾液腺、涙腺および上部呼吸道への分布、コロナウイルスに特徴的なウイルス粒子の電顕的証明によって、まぎれもなく、その感染症に一致するものと見られた。従って提出標本に対する診断は“ラットの唾液腺・涙腺炎における急性唾液腺炎”となる。